

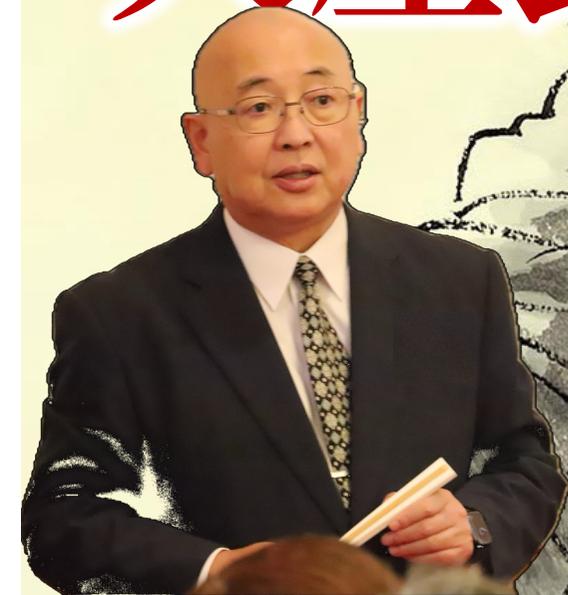
第42回 七五読み古事記勉強会

大屋毘古神

大屋毘古神と根堅州国

神

倭塾サロン
小名木善行



前回までのお話

焼けた大石に轢かれて死んだ大穴牟遅神。

治療のために蜃貝比売（きさがいひめ）と

蛤貝比売（うむがいひめ）が遣（つか）わされ、

大穴牟遅は、麗（うる）わしい壯夫（おとこ）に

なって、外にも遊びに行けるようになりました。



今回のお話（現代語訳）

八十神たちはこれを見ると、また欺（あざむ）いて、大穴牟遲を山に率（ひき）いて入（はい）り、大きな樹木を切り伏せて、茹矢（ひめや）を打ちたてておいた中に入るように命じ、大穴牟遲が入るやいなや

その氷目矢（ひめや）を打ち放って、拷（う）ち殺しました。

御祖命（みおやのみこと）は哭（な）きながら探し求め、見つけ得たので、すぐにその木を折って

救い出して治療すると、その子に言いました。

「お前は、ここにいたら、ついには八十神たちに

滅（ほろぼ）されてしまうであろう」

そしてすぐに木の国の大屋毘古神（おほやひこのかみ）のもとへ八十神たちを連れて（避けて）遣わしました。

けれど八十神たちは追いかけてきました。

そして矢を向けて引き渡しを求めました。

大屋毘古神は、大穴牟遲を木の俣からこっそりと漏れ逃がすと言いました。

「須佐能男命（すさのをのみこと）がおいでになる

根の堅州国（ねのかたすくに）に向かいなさい。

必ずその大神が力になってくださいます。」

これをみていた

やそがみは

於是八十神見

あざむきやまに

ひきいれて

且欺率入山而

おおききりふせ

ひめやをば

切伏大樹茹矢

うちたつなかに

いれしまむ

打立其木令入其中

すぐにひめやを

うちはなし

即打離其氷目矢而

おほなむちをば

うちころす

拷殺也

みおやがなきつ

もとめれば

尔亦其御祖命哭乍求者

みえたそのきを

おりてだし

得見即折其木而取出活

そのこにつげて

いはくには

告其子言

「ながここあらば

ついにをば

「汝有此間者遂

やそがみたちに

ほろぼさる」

為八十神所滅」

そこできのくに

おほやびこ

乃違遣於木国之

みもとにたがえ

やりましき

大屋毘古神之御所

しかしやそがみ

もとめおひ

尔八十神覓追

およびいたりて

やざしこふ

臻而矢刺乞

きのまたよりて

もれにがし

時自木俣漏逃

のらしいはくは

「すさのをの

而云

「可参向須佐能男

みことのいます

ねのかたす

命所坐之

くににまいらば

かならずや

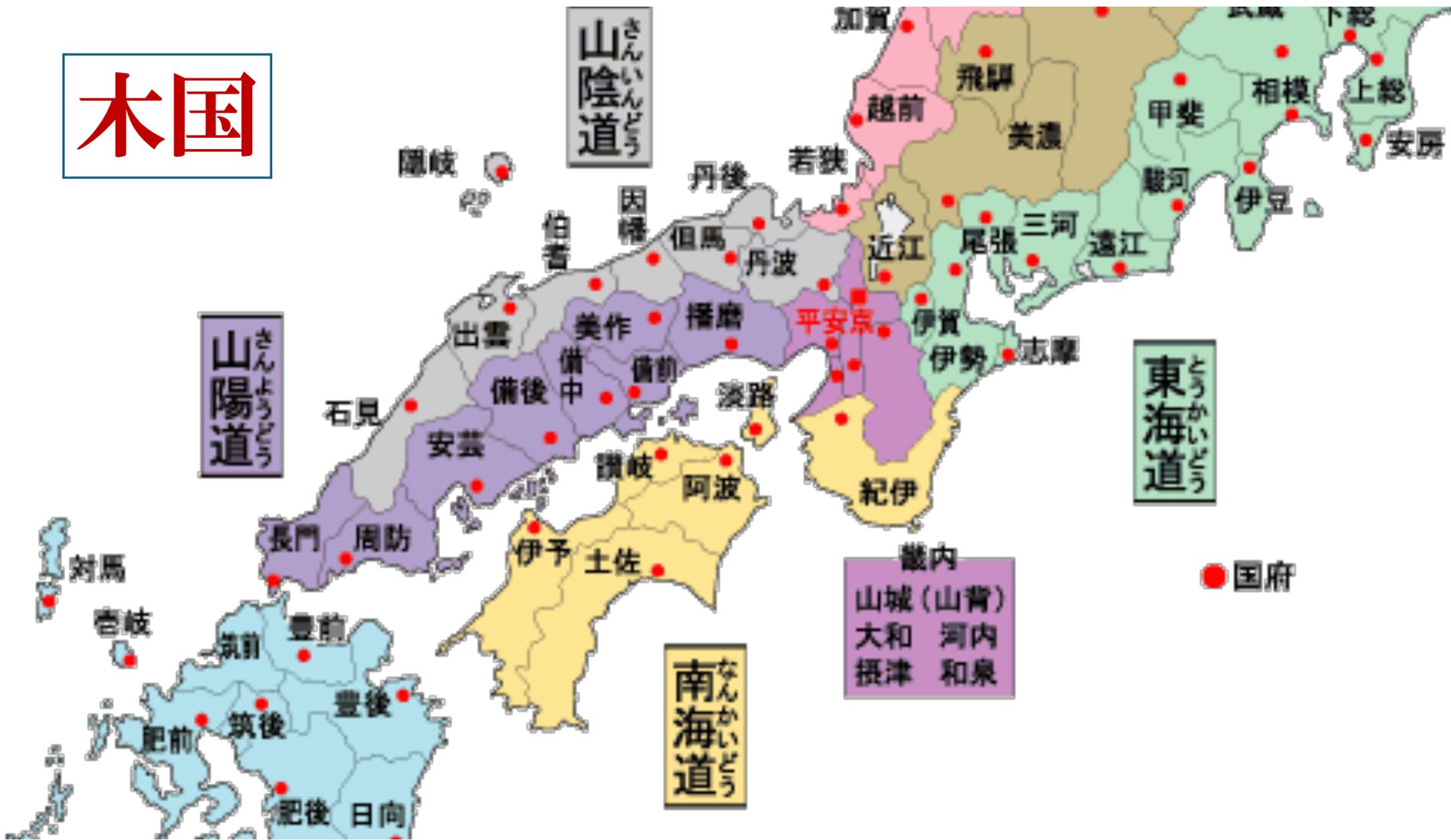
根堅州国必

そのおほかみと

はかるなり」

其大神議也」

木国



覓



手をかざして見る形。
何かをさがし求める意。

臻



声符は秦(しん)。
至り集まる意。
〔京房本〕に「水、臻りに至る」
衆多・急速の意がある。

伊太祁曾神社 和歌山県和歌山市

五十猛命を祀り、木の神として知られる。

倭文 (しとり) 神社

鳥取県東伯郡

大屋毘古神を祀る神社

那須加美乃金子神社

栃木県那須塩原市

大屋毘古神を祀る神社の一つ

須佐能男命

須佐之男命

能力を意味する漢字。

八俣遠呂智退治をされた須佐之男命本人ではなく、
その末裔を意味しているものと思われる。

代々、初代須佐之男命の御魂を受け継ぐことで
その能力を保持した人物と考えられる。